

【論文】

ハムレットの ‘To be, or not to be’ ～何が問題なのか

磯山 甚一

Hamlet’s ‘To be, or not to be’ — What Is It about?

ISOYAMA, Jinichi

要旨:この論考では、シェイクスピアの生涯に関する記録をとおして『ハムレット』におけるこの作者の生きていること (to be) をめぐる言説の特徴を探る。シェイクスピアが演劇人として活動した近代初期イングランド、特にロンドンに生きていた人々は家族や知人との永遠の別れをわれわれよりもずっと身近に経験し受け止めていた。今日のわれわれはその当時の人々がわれわれと同じようにその経験を受け止めただろうと、今日の経験を当たり前の前提としないことが求められる。シェイクスピアの作品を理解するために、様々な過去の記録をとおして可能な限りの知識を備えて準備をすることが必要である。そうすると、『ハムレット』の ‘To be, or not to be’ で始まる独白もまた違った様相と意味を帯びるように見えてくる。

キーワード: シェイクスピア ハムレット 独白 平均寿命 人口動態

16～17世紀イングランドの「人口動態」

先進国の仲間入りを果たしている今日の我が国において、生まれた乳児は男子であれば80.75歳、女子であれば86.99歳まで生きることが統計的に期待できる。0歳の時点での平均余命として算出される数字であり、いわゆる平均寿命である(2017年3月1日厚生労働省発表「完全生命表」より2015年日本人の平均寿命)。そのような長寿が当たり前の今日の日本で、国民の健

康と福祉に関わる政策の遂行を目的としていくつかの段階に年齢区分がなされている。すなわち、生まれてから14歳までがその人の長い人生の準備段階であり、すべての国民が「子ども」として保護され教育を受ける権利をもつ段階である(注1)。続いて15歳から64歳までがいわゆる「生産年齢人口」として区分され、国民は働く権利と義務をもち同時に税金を納めなければならない。65歳に達すると今日の日本ではいわゆる「高齢者」の仲間入りを果たし年金受給年齢層になる。さらに年齢を重ねて75歳を迎えると「後期高齢者」としての扱いを受けるのである。さらに、2015年の統計では、日本国内で100歳を越えた超高齢者の数も6万人を超えたというように(注2)、平均寿命の数字はここ数十年で加速度的な伸びを続けている。約半世紀前の1956年でさえ、女性が67.54歳、男が63.59歳がその数字であった(注3)。

生まれた時点で男女ともに80年から90年を生きることが平均的に期待できるような社会——そのような社会においては、生まれてから65歳の高齢期に入る頃までは、自分と同じ年代に生まれた人々が鬼籍に入ったという報に接する機会のごく稀であり身近な人々との永遠の別れがありうるといふ実感は乏しい。しかしやがて自分が「高齢者」の仲間入りをする頃には、自分の親の世代がほぼ平均寿命に達する。次には自分と同世代の人々の身に起こるそうした報せが少しずつ届くようになるだろう。それは自分の身にもひたひたと順番が迫っているという実感を与える機会でもある。

以上のような今日の人口学的数字を一覧した後で、16世紀から17世紀にかけてのイングランドを含むヨーロッパにおいて、ウィリアム・シェイクスピアがロンドンの演劇界で活躍していた頃のいわゆる「人口動態」に関する数字を探してみる。

当時のヨーロッパはまだ人口が全体としてきわめて少なく、都市や村落の規模も非常に小さかった。人口はほとんど増加しなかったし、増加したとしてもほんのわずかであった。だがその原因は、低い出生率にではなく高い死亡率にあった(注4)。

すなわち、世紀の変わり目の1600年を挟んだその時代は、イングランドを含むヨーロッパは「人口様式」において「高出生率・高死亡率(多産多死)」で特徴づけられる段階の社会とされ、「人口転換」という人類史的な大転換が未だ起こっていない段階にあった。われわれ人類(ホモ・サピエンス)が誕生して以後数十万年規模で人類はずっとその局面下にあったとされている。ヨーロッパにこの革命的「人口転換」が起こるには、シェイクスピアの時代からあと1世紀半くらいは待たなければならなかった。シェイクスピアが劇作家として活躍したヨーロッパの「近世」または「近代初期」と呼ばれる時代について次のような指摘がある(なお次の引用中の記号「‰」は、「パーミル」と読み、「千分率」のことで、1,000分の幾つであるかを示す)。

一般にある国ないし社会の「人口様式」(Bevölkerungsweise)は、歴史的にみると、高出生率・高死亡率(多産多死)の第一局面から、高出生率・低死亡率(多産少死)の第二局面を経て、低出生率・低死亡率(少産少死)の第三局面に移行する。「人口転換」(demographic transition)と呼ばれるこの歴史的過程をヨーロッパについて素描すれば、次のようになる。すなわち、人口転換以前の時代においては出生率と死亡率はともに高い水準(約30‰)にあったが、18世紀の後半以降まず死亡率が下がりはじめ、その結果としてかなり急激な人口増加(「人口爆発」と呼ぶ学者もいる)が生じた。しかし19世紀後半にあつて産児制限が普及しはじめると、出生率が低下し、少産少死(出生率・死亡率ともに15‰前後)の人口様式に移行した。大抵のヨーロッパ諸国では、この移行が完結するまでにほぼ200年を要した(注5)。

ヨーロッパにおける「人口転換」に関する以上の指摘を図式的に表せば次のようになる(注6)。

- 第一局面^{フェーズ} 人類の誕生から18世紀前半まで
(高出生率・高死亡率 = 多産多死)
- 第二局面^{フェーズ} 18世紀後半以降から19世紀後半まで
(高出生率・低死亡率 = 多産少死)
- 第三局面^{フェーズ} 19世紀後半から始まり今日に定着
(低出生率・低死亡率 = 少産少死)

劇作家シェイクスピアに関連させて本論で考察しようとしている16世紀後半から17世紀前半は、これらのうちで第一局面^{フェーズ}——多産多死の局面——に属する。第二局面^{フェーズ}に移行する1世紀くらい前の準備段階である。シェイクスピアはそのような局面^{フェーズ}においてロンドンの北西方角にあるストラットフォード・アポン・エイヴオンという町に生まれ、成長し結婚したのちロンドンを拠点として演劇活動を続け、やがて故郷のストラットフォードに帰って短い晩年を過ごした。確かに彼の兄弟姉妹は当人も含めて男4人女4人、合わせて8人という典型的な「多産」の例であり、母メアリはほぼ2~3年間隔で出産し、末っ子が一人前になった(そしてロンドンで埋葬された)年の次の年には永遠に帰らぬ人となった。長男のウィリアムが44歳の年である。今日の少産少死の局面^{フェーズ}ではこのような多数の兄弟姉妹を持つ人々は稀有な存在であろう。

シェイクスピアとその兄弟姉妹、平均寿命

次に掲げるのは、ウィリアム・シェイクスピアの兄弟姉妹8人の生没年、そして計算上の享年をまとめた数字である(実際は弟と姉妹だが)。

姉	ジョウン (1558~?)	乳児期に神に召された
姉	マーガレット (1562~1563)	1歳
	ウィリアム (1564~1616)	52歳、われらの劇作家
弟	ギルバート (1566~1612)	46歳

妹	ジョウン	(1569～1646)	77歳
妹	アン	(1571～1579)	8歳
弟	リチャード	(1574～1613)	39歳
弟	エドマンド	(1580～1607)	27歳 (注7)

劇作家ウィリアム本人とその姉2人、妹2人、弟3人、合計8人の生没年である(注8)。彼の父母の最初の子であるジョウンの没年が不明のままとなっているが、その他はすべて生没年ともに記録が残されている。長男のウィリアム・シェイクスピアが英文学史上で最も有名な人物になったおかげで、彼の身辺について今日で言えば個人情報に関わる数字に関心が高まり、彼の兄弟姉妹の生没年の調査が丹念に行われた。ストラットフォードの教会に残された記録が詳細に発掘されることになった。幸運なことに、シェイクスピアの誕生の直前にストラットフォードの教会でも記録が残されるようになったのであった(注9)。

これら8人の男女のグループが16世紀末後半から17世紀初めにおけるストラットフォードやさらには広くイングランド地域の住民における誕生と生涯の典型的な数字かどうか、歴史人口学という学問が明らかにしようと試みているが、さしあたって参照して確認すべき正確な数字は見当たらないようだ。ただし、ひとつの具体的な家族の例であることは間違いなく、その限りにおいて具体的なサンプルとなりうると思われ、これらの数字に加工を試みる。

ウィリアムの兄弟姉妹のなかで最初の子の没年が不明のままであるが、二人いる妹の一人が一番上のその姉と同じジョウンと名付けられたことが手がかりを与えてくれる。その事実から、同名の姉ジョウンはその妹が生まれた時点ですでに家族の一員ではなかったことを意味する。というわけで姉のジョウンは仮に3歳まで生きたと仮定しておこう。同じ名前を与えられた妹のジョウンは幸運にも長生きして、77歳という当時としては驚異的な長寿を全うする。今日でいえばおそらく百歳を超えた長寿者にも匹敵

する年齢であり、乳児期に神のもとに召された同名の姉の分も生きたのかもしれない。かくしてこれら8人の兄弟姉妹の平均寿命を計算すると、31.6歳となる。この平均の数字は、上述の人口様式の第一局面——多産多死の時代——であるところの16～17世紀ヨーロッパにおける平均寿命と人口学的に推定される数字とちょうど見合うものである。シェイクスピアが活躍した後に約半世紀を経た1660年代のイギリスで平均寿命は32歳だったという(注10)。

ウィリアム・シェイクスピアの経験した永遠の別れ

以上のような数字を加工して、われらの劇作家ウィリアム・シェイクスピアがごく近親者との別離に絞ってどれくらいの頻度で接していたかを記録がある限りでまとめることが可能である。ウィリアムが生まれたのが1564年4月であり、物心がついた彼が接したであろうと推測できる離別の経験は次のとおりである。次の一覧で()内はウィリアム・シェイクスピアの年齢を表す。彼が30歳代後半になって以後、52歳で自分の生涯を閉じるまでかなり頻繁に近親者を失ったのである。ロンドンのサザック大聖堂に葬られたという弟のエドモンドを除いてすべてストラットフォードのホーリー・トリニティ教会に葬られた(注11)。

1579年	(15歳)	8歳の妹アン
1596年	(32歳)	11歳の息子ハムネット
1601年	(37歳)	71歳(?)の父親ジョン
1607年	(43歳)	27歳の弟エドモンド
1608年	(44歳)	68歳(?)の母親メアリ
1612年	(48歳)	46歳の弟ギルバート
1613年	(49歳)	39歳の弟リチャード

彼が誕生する以前には、彼以前に生まれた姉二人が1歳とおそらく3歳頃

に相次いで短い生涯に幕を閉じた。しかし、彼の兄弟姉妹で乳児期までしか生きられなかった子どもはその二人だけである。当時の家族は、0歳から満1～2歳頃の乳児期までしか生きられない例が圧倒的に多かったとされている(注12)。それを考慮すると、シェイクスピアの兄弟姉妹のなかで乳幼児期に葬られた例は二人であり、その割合はその当時としては比較的少ないことが特徴である。一般論としてだが、乳幼児期を生き延びる確率はその子どもの育つ家庭の健康と栄養の管理状態が深く関係すると考えられるから、1564年のウィリアムの誕生以後の彼の家庭環境は比較的恵まれたものであったと考えていいだろう。ウィリアムが生まれた後、ジョン・シェイクスピア一家のその長男はその姉二人と同じ運命を分かち合わず、すくすくと健康に乳児期を生き延びた。それはなんとという幸運であったことか。彼がストラットフォード・アブオン・エイヴオンで少年時代を過ごしてグラマースクールに通ったらしいことから窺える恵まれた家庭環境とも符合する。

青年となったウィリアムは生まれ故郷の小さな町ストラットフォードを離れ、やがてロンドンで演劇活動に従事した。故郷とは比べ物にならない大都市ロンドンの人口学的環境について次のような指摘がある。

[十六世紀の]ロンドンには事実上いつもどこかにペストがあり、だいたい十年ごとに大流行しては大勢の命を奪った。生活に余裕のある人たちは大発生たびにロンドンから逃げ出した。・・・ここで生き延びるのは並大抵ではなかった。ロンドン市内のどこをとってみても寿命はせいぜい三十五歳で、二十五歳まで生きられるかどうかという貧民地区までであった。ウィリアム・シェイクスピアが初めて目にしたロンドンは、圧倒的なまでに若者の都市だったのである(注13)。

若者の都市ロンドン——これは今日から見ての言い方である。若者たちだけが集まったからそうなのではなく、老人期まで生き延びる人々の数それ

自体が少なかったせいなのだ。

ウィリアム・シェイクスピアのロンドンにおける演劇活動の始まりとの関連で同時代の演劇史のなかでいつも言及され登場するのがロバート・グリーンという名の彼の6歳ほど先輩の劇作家である。そのライバルが「シェイクシーン(Shake-scene)」という語を用いて新進のシェイクスピアに言及し妬みの気持ちを苦々しく表現したのは、自分の命の火が今日から見れば青年ともみなせる32歳で尽きることを予感して書き残した文章の中であった(注14)。また、ウィリアムと同じ年の1564年に生まれたとされるクリストファー・マーローも1593年の5月30日に短い生涯を青年期の只中の29歳頃で閉じたと伝えられる。マーローは何かの病だったわけではなく、ロンドン近郊のデトフォード・ストランドの一軒家で事件に巻き込まれて刺された結果であったとされている(注15)。

『お気に召すまま』における人間の生涯の7段階

ジェークイズ この世界はすべてこれ一つの舞台、
人間は男女を問わずすべてこれ役者にすぎぬ、
それぞれ舞台に登場してはまた退場していく、
そしてそのあいだに一人一人がさまざまな役を演じる、
年齢によって七幕に分かれているのだ。

ジェークイズが述べるその7段階とは次のとおりである。

- 1 the infant (赤ん坊)
- 2 the whining school-boy (泣き虫小学生)
- 3 the lover (恋する若者)
- 4 a soldier (軍人)
- 5 justice (裁判官)
- 6 pantaloons (間抜けじじい)
- 7 second childishness, mere oblivion (第二の赤ん坊、まったくの忘却)

(以上、『お気に召すまま』(2幕7場)の日本語訳は
すべて小田島雄志訳による。下線は引用者)

ジェークイズのセリフで注目すべきは、「年齢による区分」といいながら、3、4、5段階を描写するために用いられた用語は一般的には年齢との関係は薄いことである。恋愛も軍務も、そして裁判官であることも、特定の年齢層とはあまり縁がなく、今日で言えば青年期から壮年期まで、いつでも成り立つ。むろん「裁判官」の語は分別がついた年長者という暗示はあるだろう。これ以外にこの台詞で気づくことは、ジェークイズが最初に「男女を問わず」と言っているにも拘らずここに表現される人生の7段階は明らかに男性の7段階であること、今日のわれわれが考えるような「老人」にあたる英語の語句や文言は見当たらないことである。

日本語で「間抜けじじい」と訳されている英語は‘pantaloon’であり、喜劇に登場する役柄名をそのまま用いたのである。シェイクスピアの用いた語彙を網羅したAlexander Schmidtの解釈によれば、‘an old fool; a standing character of the Italian comedy’となっており、イタリア喜劇に老人型人物として登場する定型化された人物像である(注16)。‘old(老人の)’と説明されているが、喜劇の中で登場する際に年齢が何歳かは不明である。今日の劇場で配役を試みて‘old’とされる役柄となればいわゆる高齢者の65歳以上を思い浮かべるであろうが、シェイクスピアの当時に65歳を越して健康で舞台を動き回れる役者を探すのは一苦勞であっただろう。『お気に召すまま』の台詞では ‘the lean and slippered pantaloon, with spectacles on nose and pouch on side’ 「鼻にはメガネ、小脇に巾着を抱え、普段履きのやせて間抜けじじい」(『お気に召すまま』2幕7場、小田島雄志訳)と描写される。続いて人生の最後の第7段階に ‘second childishness, mere oblivion’ とあるのは、子ども状態に戻って忘れっぽくなること、記憶力の喪失に言及したものであろう。今日の流行の用語では「認知機能の低下」であろうか。しかしこれも一般的に老人だけに特有ではないし、特定の幅の年齢層と結びつけるわ

けにはいかない。

シェイクスピアに登場する老人の姿をした登場人物たちがすべて「間抜けじい」型に属するわけではない。これまで見たとおり、シェイクスピアの時代ではいかなる年齢層でも降りかかる可能性のある運命(=永遠の眠り)に見舞われずに生き延び、幾重にも年輪を重ねた人物は、知恵をそなえて尊敬に値するとみなされる場合がある。例えば「白い髭を生やした(grey bearded)」姿であることが、とにかくそこまで生き延びた事実だけでも尊敬の念を引き起こすのであろう。『空騒ぎ』で主要人物の一人ベネディックが次のように述べる。

あの白髭が言うとなると——あのようなりりっぱな老人の胸にたちの悪い
いたずらがひそんでるはずはない。

(『空騒ぎ』2幕3場(小田島雄志訳) 下線は引用者)

ここで「白髭」、「りっぱな老人」として名指しされるのはレオナートという父親である。『空騒ぎ』はその「老人」の娘が結婚する物語であるが、その彼が今日の「高齢者」の域の年齢に達しているかどうかは判断が難しい。

王子ハムレットの年齢

『ハムレット』の第5幕1場に登場する道化役の墓堀人たちの会話にはハムレットの年齢に言及する数字が含まれ(注17)、劇中ハムレットの年齢が30歳であるとされるのは、この場面に出てくる数字を根拠としている。ここでハムレットの話し相手になる墓堀人は、オフィーリアを埋葬するための墓穴を掘っている。墓堀人になって以来これまでに何年経過したかと問われたその道化役は、話し相手が誰かもわからないまま、自分の知っていることのありったけを答える。それは先王ハムレットがフォーチンブラスとの戦いに勝利し、しかも王子ハムレットが生まれた日に当たり、30年前のことだという。

「そもそもあっしがおそれ多くも墓堀りにおなりあそばした日というのはね、旦那、前の王さんのハムレットさまがフォーチンブラスの野郎をやっつけなさった当日なんで。」

「ありゃ、ほれ、あのハムレット王子さまがお生まれなすった日じゃねえか」

「あっしもここじゃ、がきの時分から今まで三十年間墓堀りをやっ
てますがね。」

(5幕1場(三神勲訳)下線は引用者)

すでに述べたとおり、ハムレットの30歳という年齢はその当時の平均寿命に見合うくらいの年齢である。医学や衛生学の知識が未だに不十分であったせいで乳幼児期を生き延びられない割合が高く、その事実が人口全体の推測される統計数字としての平均寿命を引き下げていることは間違いない。それを考慮すれば、当時ある人が20歳代まで生き延びた場合には、その時点での平均余命は0歳の平均余命である平均寿命よりもかなり長くなって、30歳代の後半以降おそらく50歳くらいまで生きることが期待できると想定される。とは言うものの、ハムレットの30歳という年齢は当時としてはいつ神に召されて永遠の眠りについても不思議ではない年齢だと言えるのである。

近代初期の高い死亡率は…人生の壮年期にあたる20歳から50歳にかけての時期に、急速な割合で死に続けていた若い成人に対しても重大な影響を及ぼしていた。相対的に見て、高齢になってから死を迎える者がほとんどいなかった時代には、死と老人とのあいだの近代的な結びつきは…実態とは無関係であった(注18)。

つまり、今日と違って、人がその生涯を閉じるのは必ずしも老人になって現役を引退し人生に一段落がついてからのことではなかった。それはその

人の人生の盛期に突然訪れるかもしれなかった。

では、亡霊となって登場するハムレットの父親の年齢はどれくらいか、何か手がかりや暗示があるだろうか。ハムレットの父は叔父クローディアスによって暗殺されたのであるから、各種の病や天然痘などの流行病とは関わりの無い原因であった。しかし、クローディアスがハムレットに父の運命を受け入れるよう説得する台詞で述べる内容から判断する限り、父王ハムレットは何が原因にしる、いつ命に関わる運命に遭遇しても不思議ではない年齢に達していた。叔父のクローディアスは次のように述べる。

だが、考えてみなさい、お前の父も父を失ったのだ。

その父も父を失った。・・・

それが必然だということは誰でも知っていることだし、

誰の耳目にもふれるものと同様、じつにありふれたことではないか。

それをなぜ駄々っ子のように

悲しんでばかりいるのだ？ よせよせ、みっともないぞ。

そうしたふるまいこそ、天にそむき、死者にそむき、人情にそむき、

そのうえ、理性のおしえにもとるといふものだ。

理性は常に父の死ということを説いているではないか。

人間の最初の死からこの方いつも

叫び続けているではないか、「これが必然だ」と。

(1幕2場(三神勲訳) 下線は引用者)

この説得の前提となっているのは、王家の中では前の世代の者が次の世代の者よりも通例として先にこの世を去る、ということである。先にも確認したとおり、一般庶民では平均寿命が30歳前後であった。そういう庶民と比べて、ハムレットのような王家の人々が比較的長生きであったことは下記のような歴史記録によっても裏付けられる。王侯貴族の日常生活での栄養状態はその時代の最も恵まれた部類に属したであろうし、医師による

治療もその当時としては最善のものが期待できただろう。また、疫病が蔓延する期間には、日常生活の基盤を別の土地に移すなどして身を守る手段を講じることが可能であっただろう。彼らがどれくらいの寿命を保ったかは、その当時の王たちのいくつかの実例から類推することが可能である。

宗教改革と宗教戦争の時代にハプスブルク家から出た皇帝たちの多くも、実に興味深いことに、60歳ないしはその前後でみまかっている。マクシミリアン1世(1519年没)は60歳、カール5世(1558年没)は58歳、彼の弟フェルディナント1世(1564年没)は61歳、マクシミリアン2世(1576年没)は49歳、ルードルフ2世(1612年没)は60歳、マティアス(1619年没)は62歳、フェルディナント2世(1637年没)は59歳、フェルディナント3世(1657年没)は49歳であった(注19、下線は引用者)。

このように、16世紀から17世紀にかけての王侯貴族を代表するハプスブルク家出身の皇帝たちは、60歳前後という当時としては比較的長い生涯を生きた。王侯貴族たちの世界では、王が60歳前後になると後継者選びが課題になったということであろう。(ちなみにイングランドのエリザベス1世の場合は薨去により退位した1603年に70歳であったから、当時のヨーロッパ諸国の王や皇帝達のなかでも特に長命であった。)父親が先に逝くのは理の当然とするクローディアスの議論に対し、この場面でハムレットは反論していない。

しかし、それはあくまでもヨーロッパの王侯貴族たちの世界に当てはまる話である。先に述べたいわゆる「人口転換」が起こる以前のヨーロッパ地域においては、シェイクスピアの兄弟姉妹について見たとおり、家族内で先に生まれた年長者から先に順番に神に召されるとは限らなかった。乳幼児期においてその確率が特に高かったのはもちろんであるが、その他のどの年齢層に属する人にとっても、いつ自分がこの世を去る異変に見舞われるかわからない、それが通例だったと言って間違いない。

近代初期の家族を今日の家族と区別する最も目立った特徴は、結婚に関することでも誕生に関することでもなく、そこに常に死が存在していたことである。かつて墓地が村の真ん中にあったように、死は人々の生活の中心を占めていた。死はあらゆる世代の人々に普通に起こる出来事であって、主として老人に起こるようなものではなかった(注20)。

さて『ハムレット』の中で年齢が判明するのは主人公のハムレットだけであるが、その30歳という年齢は意図的に設定されていることは間違いない。先の墓掘り人たちの台詞の数字は、ハムレットの誕生を取り巻く出来事をめぐって物語内で一貫しているからである。その出来事の一つは、父と母が結婚して30年になることであり、もう一つは、幼いハムレットを背負ってくれたという道化ヨリックが埋葬されて23年経過していることである。ハムレットの依頼で、しかもハムレットの書き加えた台詞を基に上演される劇中劇で、自分と妃との結婚期間に関する劇中王の台詞も次のとおりである。30年という歳月がわざわざ強調されている。

妃よ、そなたと余とが互いに心と心を許し、
婚姻の神の御手によって、妹背^{いもせ}の契^{ちぎ}りを結んでより、
陽^ひの大神の御車ははやすでに三十^{みそたび}度までも
海の御神の汐路を進み……
三十を十二重ねた月ばかりの光に輝きて、廻り廻りて、
はや十二を三十重ねた。

(3幕2場(三神勲訳) 下線は引用者)

さらに、道化ヨリックが墓に埋葬されていた期間について、墓掘りをする道化の台詞は次のとおりである。ハムレットがヨリックは自分を背負ってくれた頃に知っていたと後で述べることと年数が符合する。

ハムレットの‘To be, or not to be’ ～何が問題なのか

(どくろをまた一つ拾いあげて)そうらまたしゃり骨だ。こいつはこれでね、もう二十三年土ん中にいたんですぞ。

(5幕1場(三神勲訳) 下線は引用者)

‘To be, or not to be – that is the question.’

以上のような「人口動態」に関する歴史的文脈を設定したところで、ハムレットの有名な台詞‘To be, or not to be’を取り上げて考察を試みる準備が整ったことにしよう。その台詞に取り掛かる前にまず、この『ハムレット』という作品内の世界を支配する信仰の問題がどう処理されているか、確認をしておきたい。デンマークの王子『ハムレット』の物語はシェイクスピアの他の芝居の多くと同じようにこの作者のオリジナルではなく、デンマークの歴史を下敷きにした物語を種本としており、描かれているのはそのデンマークにキリスト教の教義がすでに渡来し、人々が、少なくとも宮廷内の人々が、キリスト教信仰に服しているとされる社会である。キリスト教の教えの一つについて、「自殺に関してはシェイクスピアは十六世紀のキリスト教教義に合わないから『ハムレット』などではこれを罪としている・・・」(注21)という判断に誰しも異論はないであろう。ハムレット自身が1幕2場の独白で、「せめて全能の神の掟が許してくれるなら、いっそ自殺でもして。」(三神勲訳)と述べて、キリスト教の教義が自殺を禁じていることを暗示しているとおりである。

シェイクスピアには時に劇中の時代錯誤が指摘されることは確かであるが、キリスト教信仰に関して『ハムレット』の作者は作品を通じて注意深い配慮をしている。作品が変われば、信教に関わる取り扱いも異なる。例えば古代ローマ時代が舞台となる『ジュリアス・シーザー』や『アントニーとクレオパトラ』の中では、自殺について作者は全く別の取り扱いがふさわしいと考えた。「自殺を気高いものと言うのが適当(で、そう言っても安全)なローマやエジプトを舞台に書いた芝居の中では、これを気高いものとして扱っている」(注22)。さらに、『リア王』の設定でも神への信仰に関して注

意深くその戯曲内で一貫した扱いをしており、『リア王』はキリスト教がブリテン国に渡来する以前の社会として設定されていることが明らかである。その中で登場人物が言及する神々は「アポロ」、「ジュピター」(1幕1場でリア、ケントの台詞)などのギリシャ・ローマの神々であって、キリスト教の神ではない。

以上を確認したところで‘To be, or not to be – that is the question.’に戻って考察を試みる。この文章につき最初に確認すると、ハムレットが‘To be, or not to be’ と語る際のこの動詞 (be) の意味上の主語は文中に明示されないことである。‘be’ の意味は後に考察するが、それが動詞であれば必ず主語があるはずである。しかしここでは形式上の主語が文中にも前後にも見当たらない。では意味上の主語が何か、と考える。主語が人間とすれば、ハムレット自身を主語として文を補ってみると、‘For me to be, or for me not to be’ となるだろう。ハムレット以外の誰か一人の第三者であれば ‘For him (or her) to be, or for him (or her) not to be’ であり、自分を含む複数の人間であれば、‘For us to be, or for us not to be’、複数の第三者であれば ‘For them to be, or for them not to be’ となるであろう。しかし、意味上の主語は独白のこの最初の部分では明らかでないので、以後注意深く独白の流れを追っていくことにしよう。

さてこの1行を日本の舞台で演じる際に役者にどのような日本語でどのように表現するか、『ハムレット』が日本に伝わった明治以来多くの試みがなされてきた(注23)。この台詞は例えば三神勲訳によれば、

「生きる、死ぬ、それが問題だ。」

となる。英語の ‘be’ という動詞は補語を伴わないで用いられる場合には「存在する、生存する」という意味になる。この訳では「生きる」となっているが、日本語の語感としては「生きている」の方が近いだろう。ここで「生きる」という訳を与えるとするれば、「(自殺を選ばないで、または前向きに)生きる」

というように、その人の意思が含まれて「生きる」が使用されるのであろう。否定形の‘not to be’も、「存在しない、生存しない」が本来の意味に近いと思われる。三神訳のように「死ぬ」とすると、本来の意味と少し離れる感を受ける。「死ぬ」は英語で‘to be killed’で表される場合があるとおり、「存在する、生存する」状態が終わり、「死んでいる、生存しない」状態への移行を表す意味が強いだらう。さらに、「死ぬ」と言う場合には、自分の意思で自分の生きている状態、生存の状態に終止符を打つ、つまり「自殺(自死)する」という意味を持つ場合がある。以上を考慮したものであろう、続く‘that is the question’を「それが問題だ」と訳したときの「それ」は、「生きる、死ぬ」のどちらを自分の意思で選ぶか、意味上の主語を‘for me’として、ハムレット自身の心がその間で揺れ動いているのだと理解されている。意味上の主語はハムレット個人で、彼のそのときの悩み、心の揺れを表すとされるわけだ。

ここでもう少し別の観点から考えてみよう。‘to be’が「生きていること、生きた状態であること」として、その否定形が‘not to be’であるとすれば、素直に考えれば後者の意味は「生きていないこと、生きた状態でないこと」となる。それは必ずしも「死ぬ」や「(自分の意思で)生きることをやめる」ということではない。「死ぬ」や「生きることをやめる」とすると、「自ら死を選ぶ」「自殺(自死)する」という意味になるだろう。しかし、「自殺する」「自ら死を選ぶ」ことは、もちろん可能性として考慮することはできるが、『ハムレット』の中のキリスト教徒で正気の人物である以上、自分自身でそれを選び自分で決行することは宗教上許されないはずだ。(オフィーリアは水に入って「おぼれた(drown'd)」とされているが、クローディアスによれば、「判断力(judgment)を失っていた」からなのだ。)何故ならば、先にも確認したとおり彼が「せめて全能の神の掟が許してくれるなら、いっそ自殺でもして。」(1幕2場三神勲訳)と述べているように、人間がみずからの意思で「死ぬ」ことや「自殺(自死)する」ことはキリスト教信仰のもとにある人間にとって罪であり、選択肢にはならない。つまり、ハムレットの口にする‘not to be’は、第一義的には「生きていない」ことであり、自ら命を絶つことを決

行する可能性への言及ではないと判断せざるをえない。すでに見たように、「自殺を気高いものと言うのが適当(でそう言っても安全)なローマやエジプトを舞台に書いた芝居の中では、これを気高いものとして扱っている」(注24)が、「シェイクスピアは十六世紀のキリスト教教義に合わないから『ハムレット』などではこれ[自殺]を罪としている」(注25)のである。

'Whether 'tis nobler in the mind'

以上、ハムレットの'To be, or not to be -- that is the question.'について考察したが、それに続く4行の台詞は次のとおりである。

Whether 'tis nobler in the mind to suffer

The slings and arrows of outrageous fortune,

Or to take arms against a sea of troubles

And by opposing end them.

(どちらが尊いのだろう、残酷な

運命の矢弾をじっとしのぶか、あるいは

寄せくる苦難の海に敢然と立ち向かって、

戦ってその根を断ち切るか。)

(日本語は三神勲訳、どちらも下線は引用者)

ここでもまず確認しておきたいことは、ここの'to suffer'と'to take ... end'という二つの動詞の意味上の主語が誰なのか、先の'To be, or not to be'の場合と同じように、文の要素として明示されないことである。

ここに'Whether ~ or ~'として提示される選択肢は、直前で述べた'To be, or not to be'を別の言い方で表現したものと解釈される場合が多い。すなわち'Whether ~ or ~'は、'To be, or not to be'と並列になって問いかけられていると理解され、その解釈に従って日本語に訳される。

しかしよく読んでみれば理解できることであるが、'Whether ~ or ~'で

述べられる選択肢は、選択肢のどちらを選んで、いずれにせよ生きていることの二つの様態なのである——生きていて「耐え忍ぶ」か、それとも生きていて「敢然と立ち向かう」か、の二つの選択肢なのだから。

この‘Whether～or～’で取り上げられる二つの選択肢がハムレットの具体的な身の上に言及しているとの解釈を基にして、さかのぼって直前の‘To be, or not to be’に反映させて日本語に訳す場合がある。つまり、後のセリフの内容を前のセリフの意味の曖昧さを解決する手がかりとするのである。亡霊に指示された復讐を執行すべきかどうか、意味上の主語をハムレット自身‘for me’として、彼の現状の身の上に当てはめて解釈する。日本語訳の具体例としては、「このままでいいのか、いけないのか(小田島雄志訳)」や、「やる、やらぬ(小津次郎訳)」、「するか、しないか(高橋康成訳)」、「このままにあっていいのか、あってはいけないのか(木下順二訳)」、「これでよいのか、いけないのか(小菅隼人訳)」(注26)等がある。亡霊が復讐せよと命令したことに対して、自分が思いきって叔父に対する復讐を執行すべきか、このまま何も行動せずおとなしくしているべきどうか、躊躇していることを表すと解釈するのだ。

ただしさらに複雑になる事情がある。前に述べている‘not to be’を「死ぬ」と解釈し、それに呼応して‘to take arms’(敢然と立ち向かう)の意味を解釈する場合があるからだ。その解釈では、「敢然と立ち向かう」ことによって、自らも破滅する(=死ぬ)ことが暗示されるという。というのも、「立ち向かう」べきものは‘a sea of troubles’(怒涛の苦難)(河合祥一郎訳)、「寄せくる苦難の海」(三神勲訳)であるから、いかに立ち向かってもそれらの「苦難」は「海」のごとくに押し寄せ、それらを最終的に「終わらせる(to end)」ことは不可能であり、自分が破滅する(苦難に立ち向かって最期を迎える、という意味で)ことによってのみ終わる、というのである。この解釈は‘not to be’を‘to be killed’の意味で「死ぬ」とする理解と調和させるための解釈と言えるであろう。しかしこの解釈は、ハムレットの語る台詞に含まれないことまで付け加えて解釈していることになるし、多くの苦難が海のように押

し寄せそれらに「敢然と立ち向う」としても、立ち向かう側が破滅することが必然のわけではない。

以上の論点を図式化してまとめると次のようになる。まず一つ目の対照は次のとおりである。日本語はこの場の前後関係を考慮してここで観客が理解する最初の意味と思われるもの。

<u>to be</u> (生きていること)	<u>not to be</u> (生きていないこと)
---------------------------	--------------------------------

続いて次の台詞が語られると、‘To be, or not to be’と同じく対照させられているように見えてくるが、実はどちらも‘to be’なのである。

<u>to suffer the slings and arrows of outrageous fortune</u> 「残酷な運命の矢弾をじっとしのぶか」	<u>to take arms against a sea of troubles and by opposing <u>end</u> them</u> 「寄せくる苦難の海に敢然と立ち向かって、戦ってその根を断ち切るか」
--	--

この‘Whether ~ or ~’の台詞が対照的に述べられるので、さかのぼって‘To be, or not to be’の解釈に影響を与える結果、‘To be, or not to be’に例えば次のような訳が与えられる場合がある。

<u>to be</u> (このままでよいのか) (やる) (するか)	<u>not to be</u> ([このままで]いけないのか) (やらぬ) (しないか)
--	--

‘To die, to sleep -- No more’

独白の言葉を追って次へ読み進むと、ハムレットの独白は‘to be’から一転して‘to die’に関する省察へと進んでいく。‘to die’に曖昧さはなく、「死ぬことは——眠ること、それだけだ」という。そして「眠りによって、心の痛みも、肉体が抱える数限りない苦しみも終わりを告げる」、「それこそ願ってもない最上の結末だ」(以上、河合祥一郎訳)と続く。

まず、ここで話題がなぜ一転して‘To die, to sleep -- No more’という「死ぬことは——眠ること」という方向に行くのか、上述の‘Whether ‘tis nobler in the mind’を「生きていること(to be)」の二つの様態とみなすことで説明できる。つまり‘Whether ‘tis nobler in the mind’以下が「生きていること(to be)」に対応するとすれば、‘To die, to sleep -- No more’で始まる部分は、「生きていないこと(not to be)」に対応するとみなせる。ハムレットは最初に‘To be, or not to be -- that is the question.’として独白を始めた。続いて「生きていること(to be)」の二つの様態について省察をした。しかし、「生きていないこと(not to be)」に思考を進めるには、「生きていること(=状態)」から「生きていないこと(=状態)」への移行そのもの——すなわち「死ぬこと(to die)」——に焦点を当てる、という風に。

さらにここで注目すべきは、この独白の一連の台詞中、この部分に至って初めてハムレットの台詞に意味上の主語が明示されることである。主語はハムレット個人(I, me)ではなかった。そうではなく、話し手を含む同じ範疇に所属する人々を指す場合や、人間一般(people in general, *POD*)を指す場合の‘we’である。後者はいわゆる「不定代名詞的に(『リーダーズ英和辞典』)用いられる‘we’である。そういえば、ここまでのハムレットの独白で彼は自分が置かれた具体的な境遇に言及してこなかったし、自分の身の上に具体的に焦点を当てたもの言いでもなかった。日本語訳ではこのような一般的な人を指す場合の‘we’は文中に訳出されないことが多い。例えばこの独白の‘we end’の訳の場合に、何か(心の痛み、苦しみ)を「われわれ(we)が終わらせる(end)」と訳すのではなく、自動詞的に「終わりを告げる(河合

祥一郎訳)となる(なお「告げる」は他動詞であるが、「終わりを告げる」で自動詞的な意味の「終わる」と同じである)。この部分に‘we’が出現して文の主語が明らかになったことを生かして、わざわざ「おれたちの心の悩み(三神勲訳)」とする訳もあるが、このように訳せばハムレットが自分の今置かれた一個人の身の上だけが念頭にあるわけでないことがより一層鮮明である。

このように出現した‘we’という意味上の主語は重要である。この場面の独白が誰を主語にして語られているかがやっと明らかになるからだ。例えば直前の‘Whether ‘tis nobler in the mind’の部分で「どちらが尊い生き方なのか」と述べて、「生きていること(to be)」の二つの様態を述べていたが、誰にとって「尊い」のか不明確であった——‘in the mind’と言っているだけだったから。しかし‘we’が主語だと明らかになれば、「われわれにとって」、または「人間一般にとって」どちらが尊いか、ということになる。さらに行をさかのぼって、独白の冒頭でハムレットが提示していた、「生きていること(to be)」と「生きていないこと(not to be)」も、‘we’が意味上の主語ならば、ハムレットを含む何らかの範疇の人々か、または「人間一般」について考慮していることになる。

以上のとおりこの独白の後半で‘we’または‘us’として出現する意味上の主語が、ずっとさかのぼって冒頭部での‘To be, or not to be’においても意味上の主語なのだろうか。一連の独白に‘we’以外の主語は出現しないという事実、さらに主語が‘I’であるという手がかりが形式上見出せない事実により、そうみなさざるを得ないと思われるのだが(独白の最後に‘my’が出現するが、それはオフィーリアの姿を見て彼女への呼びかけの台詞である)。すると、あの‘To be, or not to be, that is the question’の一行は、‘For us to be, or for us not to be’ということになるだろう。「[[われわれが]生きていること」と「[[われわれが]生きていないこと」を対照させているのである。それはすなわち、ハムレット個人の問題ではないこと、自分一人がどちらかを選ぶべきかについて思い巡らしているのではないことになるだろう。

かくして、この独白の全体がハムレットを含むある範疇の人々または人間一般(we)を主語として語られているとしたならば、冒頭の台詞を日本語にする場合には、「生きるか、死ぬか」ではふさわしくないことが明らかであろう。ハムレットが自分を含む一定数の他人や人間一般に成り代わって「生きるか、死ぬか」、われわれがどちらを選ぶべきかを「問題」として思い巡らしているわけではない(というより、それはあり得ないおせっかいではないか)。むしろ、「生きていること(to be)」と「生きていないこと(not to be)」を対照させて、両者の関係を「問題(question)」として思い巡らしている、ということではないか。

この論考で確認してきたとおり、シェイクスピアの生きた16世紀から17世紀にかけて、人口動態において「多産多死」の局面で生を受けた人々にとって、自分がいついかなる運命によって‘not to be’つまり「生きていない」状態に陥るか、自分にも誰にも分からなかった。そういう異変は彼らの周辺に当たり前に起こりつつあり、偏在していた。乳幼児期であれ、少年期であれ、「生きていること」の絶頂期の青年期であれ、老年期に達していようがいまいが、いつ起こっても不思議ではなかった。だから、「生きていること」と「生きていないこと」の対照を突きつけられて思いを巡らす機会には事欠かなかったはずである(注27)。

注

『ハムレット』の本文と翻訳は次の版を用いた。

Harold Jenkins (ed.), *Hamlet*, The Arden Edition of the works of William Shakespeare, Methuen, 1981.

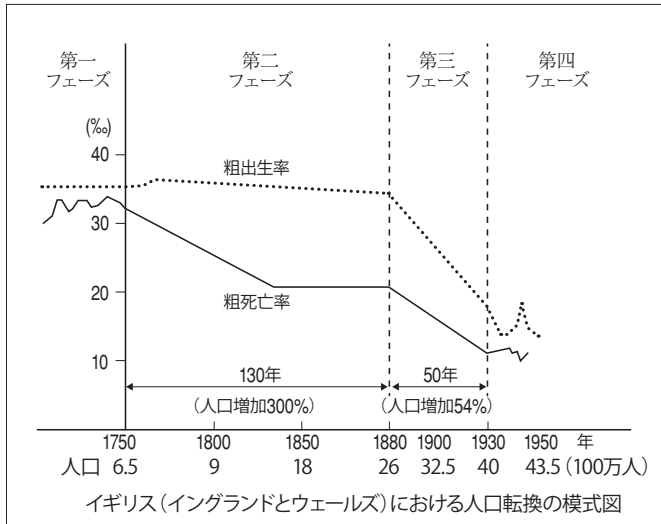
小田島雄志『から騒ぎ』白水社、1993年

三神勲・中野好夫訳『シェイクスピア ハムレット マクベス リア王 ロミオとジュリエット』河出書房、ポケット版世界の文学、1967年

河合祥一郎訳『新訳 ハムレット』角川文庫、2003年

1. この段階が「子ども」期として「特権化」されるのは古今東西で普遍的に見出される現象ではなく、そう特別視しようとする意図的な歴史的な過程が必要であった。フーコー『フーコー・コレクション6』(ちくま学芸文庫、2006年) p.288.

2. *The Japan News* 2016年9月14日, 'Centenarians surge to more than 65,000.'
3. 『日本経済新聞』2017年2月4日特集記事「『お年寄り』は何歳から？」
4. 高木正道「近世ヨーロッパの人口動態（1500～1800）」『静岡大学経済研究4（2）』（1999, 147-174）, p.147.
5. 同上, p.147.
6. 1750年ころから起こり1930年代に終結したとされるヨーロッパの「人口転換」については、大塚柳太郎『ヒトはこうして増えてきた——20万年の人口変遷史』（新潮選書、2015年）pp.195～207を参照。



大塚柳太郎『ヒトはこうして増えてきた』（新潮選書、2015年）p.197より

7. ちなみに彼の兄弟姉妹以外の近親者について知られている数字をあげると次のようになる。シェイクスピアの父、母、妻の生年については注9にあるとおりストラットフォードでは記録が保管されなかった時期にあたるので推定となる。息子のハムネット一人を除いて当時としては長命であることが見てとれる。

父	ジョン	(1530? ~ 1601)	71歳?
母	メアリ	(1540? ~ 1608)	68歳?
妻	アン	(1556? ~ 1623)	67歳?
娘	スザンナ	(1583 ~ 1649)	66歳
息子	ハムネット	(1585 ~ 1596)	11歳
娘	ジュディス	(1585 ~ 1662)	77歳
8. 次の資料を中心にして作成。E.K. Chambers, *William Shakespeare, A Study of Facts and Problems*, (Oxford University Press, 1930) , p.xvi.
9. ビル・プライソン『シェイクスピアについて僕らが知りえたすべてのこと』（NHK

出版、2008年）p.39.

「…1538年に、イングランドのすべての教区で、出生、死亡、結婚の記録を保存するようにとの命令が出たのだが…ストラットフォードは1558年になってやっと記録の保存を始めた。」

10. 「1661年におけるフランスの平均寿命を25歳以下」、「1660年代の平均寿命は、イギリスでは32年、ドイツのドレスラウでは27.5年であった」、(高木上掲論文p.148)。ただしミシェル・フーコーによれば、平均寿命という観念それ自体はヨーロッパの1720年代から1800年にかけて「医師の職業化」、「健康という政策」を背景に意識化されていったとされる。フーコー『フーコー・コレクション6 生政治・統治』、(ちくま学芸文庫、p.281)。シェイクスピアが演劇活動をしていた1600年前後のイングランド社会においては、「病があらわれた場所ですれを取り除く」ことを担当する者としての医師であっただろう。

ただし、これらとは多少異なり、若干高めの数字も見出すことができる。ピーター・ラスレット、川北稔・指昭博・山本正訳『われら失いし世界——近代イギリス社会史』(三嶺書房、1986年)に掲載された表10 (p.147)では、シェイクスピアの生きた期間前後のイングランドにおける出世時における平均余命は以下のとおりである。

1541年	33.7歳
1571年	38.2歳
1601年	38.1歳
1631年	38.7歳
1661年	35.7歳

11. ビル・ブライソン、上掲書、p.52
12. 高木、上掲論文、p.149.
13. ビル・ブライソン、上掲書、pp.64～5.
14. *Dictionary of National Biography*によると、*Greenes Groats-Worth of Witte* に以下のような一節がある。

there is an upstart Crow, beautified with our feathers, that with his *Tygers heart wrapt in a Players hide, supposes he is as well able to bombast out a blanke verse as the best of you: and being an absolute Johannes fac totum, is in his owne conceit the onely Shake-scene in a countrie.*

15. Christopher Marlowe については、*Dictionary of National Biography* による。
16. Schmidt, Alexander, *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*, Dover Publications, Inc. 1971.
17. 『ハムレット』のテキストとしてフォリオ版、クォート版が複数伝わっていて、これらハムレットの年齢に関わる部分がテキストに関する議論の一つになっている。しかしハムレットの年齢に関わる30歳という数字がテキスト間で異同があるわけではない。
18. L. ストーン、北本正章訳『家族・性・結婚の社会史 1500—1800年のイギリス』、(勁草書房、1991年)、p.50
19. 高木、上掲論文 p.148

20. ストーン『家族・性・結婚の社会史』（勁草書房、1991年）p.47 ここで「近代初期」と言われているのはちょうどシェイクスピアの生きた時代を語るために用いられる用語である。
21. ビル・プライソン、上掲書、p.84
22. 同上、p.85.
23. 河合祥一郎訳『ハムレット』（角川文庫、2016年）は「訳者あとがき」の中で、この‘To be, or not to be – that is the question.’の日本語訳を43例挙げて紹介している。
そこに挙げられていないが、大場建治氏の『対訳・注解 シェイクスピア選集（全10巻）』（研究社、2004年）に収められた『ハムレット』では次のような訳がある。「存在することの是非、それが問題として突きつけられている。」
24. 同上、p.84.
25. 同上、p.84.
26. 河合祥一郎上掲書「訳者あとがき」（p.227～8）による。
27. ヴィクトール・E・フランクフル、池田香代子訳『夜と霧』（新版、みすず書房、2002年、pp.129～30）では、ハムレットと同じような言葉を用いて自分の経験を述べている記録を読むことができる。心理学者にして、ナチスの強制収容所を体験したヴィクトール・E・フランクフルである。彼は次のように述べる。

ここで必要なのは、生きる意味についての問いを百八十度方向転換することだ。わたしたちが生きることからなにを期待するのではなく、むしろひたすら、生きていることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ、ということを知り、絶望している人間に伝えねばならない。・・・もういいかげん、生きていることの意味を問うことをやめ、わたしたち自身が問いの前に立っていることを思い知るべきなのだ。生きていることは日々、そして時々刻々、問いかけてくる。わたしたちはその問いに答えを迫られている。考えこんだり言辞を弄することによってではなく、ひとえに行動によって、適切な態度によって、正しい答えは出される。

生きているとはつまり、生きていることの問いに正しく答える義務、生きていることが各人に課す課題を果たす義務、時々刻々の要請を満たす義務を引き受けることにほかならない。

アウシュヴィッツ等の強制収容所の極限状況を生き延びた人の記した言葉である（ここで「生きている（こと）」と訳されている語は英語版では‘life’となっている）。この思考をハムレットに当てはめれば、「生きていること（to be）」の意味をハムレットが問いかけているのではなくなる。かえって、彼がその問いの前に立たされている。ハムレットが問いかけられるものとして、日本語訳をもう一つ提案してみたい。なお、「生きてあるか、生きてゐないか」は、河合祥一郎「訳者あとがき」で1949年10月刊の竹友藻風の訳として紹介されている。

ハムレット 生きているか、生きていないか、それが問われている。